

老いて心の中に

高橋白美



老いて心

高橋白美

江苏工业学院图书馆
藏书章



発行 日本図書刊行会
発売 近代文芸社

お　　こころ　なか
老いて心の中に

1997年11月20日　第1刷

著　者　高橋　白美（たかはし・はくび）

発　行　鑿日本図書刊行会

発　売　鑿近代文芸社

〒112 東京都文京区目白台2-13-2

TEL (03)3942-0869

FAX (03)3943-1232

印　刷　信毎書籍印刷株式会社

製　本　小泉製本所

© Hakubi Takahashi 1997 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-89039-603-9 C0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

老いて心の中に／目次

タンポポ（当時四歳）

5

天国に結ぶ恋（当時四〜六歳）

7

王子様（当時六歳）

23

夜汽車（当時五〜八歳）

26

ピアノとカヤン、カヤン（当時六〜八歳）

31

涙（当時七歳）

33

奥しちゃん（当時七、八歳）

36

ヒバリ（当時七、八歳）
40

西風（当時八歳）
42

閣下（当時八歳）
44

別れ（当時八歳）
48

コオちやん（当時九歳）
55

兵隊送り（当時九歳）
58

軍用列車（当時九歳）
67

忠魂碑（当時十歳）
75

あとがき

老いて心の中に

タンポポ

(当時四歳)

まだよちよち歩きの妹と私の手をひいて、祖母はよく散歩につれて行った。妹も私も裾に、ギヤザギヤザのついたアブチャンをしていた。ポッケもついていたその頃のエプロンは、アブチャンと呼ばれていた。畑の小道には、すみれやタンポポ、スイカンポ、土筆、ペンペン草等が沢山咲いていた。麦畑は姉妹が隠れてしまう程青々と繁り、黄金の菜畑の上を白や黄色の蝶がダンスをしていた。当時はオートバイや車の騒音もなく青い空の下、春の陽がとてもやさしかった。小さい姉妹は歓声を上げて草花を摘んでアブチャンに受けとめ、裾をつまんでいた。家に帰ると祖母と母が、

「まあ、まあ、可哀相に。お花がすっかりしおれてしまつて」

と言つて深皿に水を入れ、花々を浮かべた。アブチャンには黄色やミドリ色の草花の汁が模様を描いていた。

時々近所のお寺さんの境内へも出かけて行った。広々したお寺の庭に、赤松が大きく枝を広げて二本あった。かなりの古木で、一本の赤松は私がやつとよじ登れる辺りで太い枝を四方に広げ、その真ん中は子供が二、三人入れる空間を作っていた。私はその中に入るのが大好きだった。オシドリの池と呼ぶ池もあつて、池のふちにはすみれや、タンポポが咲いていた。祖

母がオシドリの頭のふちに咲くタンポポを欲しがる妹のために取ろうとして、足を踏み出した。とたんに、どぼんとオシドリの頭の中に落ちてしまった。私は兎の様に走って母を呼びに行つた。母と二人で戻ってみると、祖母はもうはい上がつて妹を押さえて立っていた。祖母からは水がぼたぼた落ちていた。まだ一歳数ヶ月の妹の、なんと、なんと、小さく愛らしかった事か。四歳の私の目を捕らえたその情景は、今も老いた私の心の額縁の中に一枚の絵として大切に残されている。

天国に結ぶ恋

(当時四く六歳)

そう、それは私の子供時代唯一戦争のない頃の話で、支那事変が昭和十二年夏に始まったので、その前の七年から九年頃の事。子供と言うより、まだ四歳から六歳位だったのだから、ほんの幼い時代の事である。

これは度々目にした事で、特に夜明けの情景は未だに心の奥深く残っている。私の住むこの辺り、天候によっては海鳴りの音がとても大きく聞こえる日がある。二里も三里もはなれた村々の古老は、その海鳴りで天気を予想したそうである。昔はね。^{むかし}今は海鳴りもとどかない様である。でも、私の家では今でも朝、そして夜、ゴオゴオと大きな海鳴りを聞く事がある。

今から十四、五年前の夜、時計の針が十二時を指した頃、私は眠りにつこうとベッドに入った。そして(今夜は随分海の音が大きいな)と思うながら枕に頭をうずめた。が、遠くの方のゴオーゴオーという音は地響きとなつて深夜をゆるがせた。すると、なんとその音はだんだん近づいて来る。そしてピャーピャーとあの独特な車の警笛と人声と、今度はガアーガアーと車の雑音に変わつて、表通りが異様なざわめきで、私は、(あー暴走族だったのか)と、枕から頭を上げず横になっていた。だが、ざわめきははてる事なくピャーピャーガアーガアーゴオゴオと流れる様に続いている。あまりものすごいので、私はベッドからおりると防寒

コートを頭から被り、表通りへ出て行つた。すると表通りの角のお婆さんが、

「すごいわよー、こわいねえー」

とブロック塀に身をよせながら私に言葉をかけた。

「これでも、もう沢山行つてしまつたのよ。でもまだ来るよ」

と、お婆さんは尚も私に説明した。私の目の前の国道一号線は、まるで車とオートバイの川のように、くねり、濁流の様に西に向かって流れて行く。もう上り線下り線もその濁流には境目がない。その濁流の中程を赤い灯を、くるくるまわしながら、パトカーが濁流にのみこまれる様に一緒に流れて行く。赤い灯は一台や二台ではない。そして、女の人の黄色い声がしたかと思うと、私の目の前を開けはなれた車の窓に腰かけ、スカートとシーツの半分位の旗をなびかせながら突つ走つて行く。かと思うと、窓のふちに立ち上がり、車の屋根より高く大きな旗を振りまわし、奇声を発しながら突つ走っている。旗は風にあおられ、ぱたぱたと鳴つた。オートバイはほとんどが二人乗りで、ジグザクジグザクとくねりながらすつとんで行く。

寒さのためではない震えが私を襲い、膝ががくがくととまらない。あのお婆さんの家のブロック塀にへばりついた。私は片目だけを塀の外に出していた。右手の方に見える信号機は、青、オレンジ、赤の信号が規則正しく点滅をくり返していた。だが、この濁流には無意味な存在だった。

やがて、西への流れに途切れが来た。そして私の目に、上り線のはじっこに何台かの車が止まっているのが見えた。濁流に逆らつて上り線を走れない車が止まっているのだと思つた。中

にはタクシーもあった。私にはその車達が小さく小さく肩をすぼめて息を殺している様に見える。濁流の干上がった一号線は、外灯に照らされてとても幅広く深夜の中にとり残された様に深^{ふか}としていた。だが、東の方の遠くではあの海鳴りの様な轟音は聞こえている。すると、下って行った西の方から一台のオートバイが東へ向かってやって来た。黒いヘルメットの少年が二人乗りで赤信号になっている交差点を突っ走って行った。「あー斥候^{せちこう}だな」と私は思った。静けさは束の間、また、ピュアーピュアーと轟音が近づいて来て、先頭にはオートバイの群れが道幅一杯に流れこんで来た。オートバイの座席の後ろの少年は立ち姿で運転している少年の肩に片手でつかまり、片腕を振りまわし氣勢を上げていた。

私の目は自然に閉じられ、数歩後ろへ下がり、もうこれ以上見てはいられなかった。オートバイの群れの後には車の濁流が続き、赤い灯のパトカーも唯々押し流されて行った。その数、数千台ではないだろうか。濁流が治^{なご}まり、ぽかんと穴のあいた様な空間が広々と深夜の中に横たわっていた。私は体が固まってしまつて、膝だけがガクガクですぐには動けなかった。車やオートバイ、人通りのない静まりかえつた国道一号線、つまり東海道の深夜の姿を、こんなにしみじみと眺めたのは初めての事だった。まるで先程迄の雑音は夢ではなかったかと思える程、静寂は際立っていた。一般の車もオートバイも人通りもない道路は、別世界の様に広々と長く、彼方迄見通す事が出来た。こんなに何もない道路の上を、風を切つて月明かりを受けて一人だけで自転車走らせたら気持ちいいだろうなあーという思いが、自転車にしか乗れない私の胸の中をかすめた。

我に返った私は恐ろしい震えと、今度は冬の寒さに震えながら家に戻った。ベッドに入ったが、寒さと恐ろしきで上下の歯がガチガチ鳴っていた。なかなか眠れそうにない脳裏に、同じ東海道の一場面が次々とかび上がつて来た。

それは冒頭に記した、四歳から六歳の頃の記憶、思い出。それはやはり音、天下の東海道を東の方から地面を伝つて来る重々しい音、同じ方角から聞こえて来た暴走族の音とは違う。だが、それは、あの海鳴りの音。遙か遠くからの……。

小さい私や妹は、衣服を沢山着せられ、おんぶされたり、だっこされたりして表通りへ連れて行かれた。まだ夜の名残の暗闇が家々を、庭を、木立を包んでいた。空には星が瞬き、星の輝きが夜明け間近の静寂を更に深めていた。私は大人になってからも良く思う事で、夜明け間近の静けさと、夜の静けさには差がある。夜の静けさの中には、人間の作り出す雑音やざわめきが混じっているが、夜明け間近の静けさには、人間からかけ離れた神秘的な静けさがある。たとえ人間が作り出す車の音でも、遠いしじまの中から、カアアと消え入る様に大気の中に吸い込まれて行く。それはあくまでも、静寂そのもののものだ。この幼い日の夜明けも正にその静寂の中にあつた。頬にふれる大気も人の足音も静寂なのだ。

表通りには人々が道路の端に長く連なっていた。道路の向かい側の家々からは寝巻の上に半纏はんてんや襦袢どてらをはおり、胸元をかき合わせながら、頭を掻き上げながら、人々が出て来た。向かい側の丸い山が濃紺の空の中に、黒いシルエツトになって盛り上がって見えた。農家の藁葺き屋根からは、もう朝餉の煙が立ち登り、山の方へ流れている。山はその煙と朝靄あさもやで裾の方がミル

クをかけた様に見えた。家の玄関を出た時よりは辺りがなんとなく白^{しろ}んで来て、早起きのカラス^{ねぐら}が山の^{さんざん}崎^ごを出て三々五々海の方へとんでいった。東の空に紅がさし、遠かった音が近く聞こえる様になり、誰も顔が音のする東の方へ向けられた。やがて整然と、サイドカーの姿が見えてきた。当時車の少ない世の中の事、交差点も信号機もなく、まだバスが走り出す時間でもなく、道路には障害物は一つもなく、今とは違つて舗装されていない土と砂利の道を、何台ものサイドカーは静かにゆつくり進んで来る。運転している人と左側に座っている人。

「あつ、兵隊さんだ」

座っている兵隊さんの左前の端に日の丸の小旗が小刻^{こきま}みに揺れていた。私は目を大きく見開いて右から左へ、右から左へと、顔を振り向けながらそのサイドカーの隊列を見守つた。何台ものサイドカーが過ぎると、オープンカーがやはり静かにゆつくりと進んで来た。どの車にも四人ずつ兵隊さんが乗っていた。白い手袋の右手を右目の横に当て、にこにこ私達に笑いかける兵隊さんもいた。とても優雅で品位に満ちたおじ様達と、私の目にうつつた。今思えば皆、将官や佐官で日本の国を守る中枢部の軍人さん達だったのでしよう。何台ものオープンカーが過ぎ去り、少し間を置いて今度は馬の嘶^{いなな}きやパカパカという音が近づいて来た。騎兵隊である程、今流^{いまりゅう}に言うカッコイイ一団だった。だが、単にカッコイイと評しては誠に失礼かと思える程、品位と勇壮さに小さな私は魅^{みちよう}了された。騎兵隊の隊列は長く続いた。そして時々、馬上から道端の人々に何か言葉をかけている。私の耳にも、「坂田山」「坂田山は何処ですか」と聞こえた。「坂田山」「坂田山」と馬上の兵隊さんは言っている。騎兵隊が過ぎると今度は迷彩色の装甲車

が何台も続き、その後ろから長く突き出た大砲の列が続いた。装甲車の後ろからは重たそうなゴゴオと音をたてる怪物の一団が現れた。戦車隊だ。戦車の天窓を開けて、兵隊さんが、すくつと立っていた。鍔^{つば}のない頭にピッタリした茶色い皮の帽子を顎^{あご}の下でバンドでしめていた。すくつと立った兵隊さんは、皆一様に人々に敬礼した。これも今流のカッコイイであった。もつとも、小さな女の子の私には、勇ましい、たのもし、美しい、と見えた。戦車隊の轟音^{ごうおん}が過ぎると、カーキ色のトラックに兵隊さんが溢れる程乗って、口々に、「坂田山は何処ですか」「坂田山を教えて下さい」と言っていた。

そのトラックの兵隊さんの姿が見えなくなると、遠くの方で、ザクザクザクと、音がしている。この頃には夜は去り、朝の爽やかな空気と東の方から斜めに差し込む陽の光がすべてのものを祝福する様にやさしく照らした。一日の中で一番美しい早朝、清潔ですがすがしく、空気がおいしい。幼い頃も、今も、朝の斜めに差し込む陽の光が、私は大好き。それは、ほんの一時の輝きで、ちよつと寝坊すると、その美しさを見のがしてしまう。よく母が、綺麗な朝を見てから、また眠ればいいでしょ、と、日曜日の朝私を起こしに來たものである。「綺麗よ、もったいないわ」と言っていた。そんな早朝の光の中を、ザクザクの音は近づき、その音は靴音だった。歩兵の大軍が橋を渡り、私達の目の前に差しなかった。背にした背囊^{はいのう}がカタカタ鳴り、ゲートルで巻いた足を勇ましくふみ出しながら、ザクザクザクと行進して来る。隊長さんの腰の右横の長いサーベル（西洋風の刀剣）が、陽の光を受けて輝き、ガチャガチャと鳴っていた。この大軍の中からも、「坂田山は何処ですか」「坂田山を教えて下さい」と、声々がとん

だ。歩兵の隊列ははてしなく続いて行く。西へ、西へ、と。当時はこのような行軍は度々あった。富士の裾野へ大演習に行くのである。

眠れぬ私の頭の中では、五十数年前の地面を伝わって来た行軍の音と、五十数年後の暴走族の音と、同じ東海道を西へ下って行つた二つの音が、何か現実ばなれした、何か不思議な気がしてならない。だが、幼い日のあの音は、小さな女の子の目に感動と情愛の涙をにじませた音だった。そして、五十数年後のあの音は、人生の半ばを過ぎたおばさんを恐怖に震え上がらせ、膝をガクガクさせた音だった。この二つの音への涙が、頭の下枕をぬらした。私は、常日頃思うのだが、都会の人々、車だらけの世の中、その人々も、数しれぬ車も、夜になるとすっかり治まる所へ治まり静けさを取り戻す。沢山の人も車も、何処へ治まってしまうのかと不思議な気持ちをおぼえる。と共に、人々が温かい家庭の中に治まっている有り様を考えると、心の中を温かいものが流れる。暴走族の少年達にも家庭はあるはず。若い躍動が暴走へと向けられているのかもしれない。その頼もしい若い躍動が、人に感動をあたえ、人に喜びをあたえる事に向けられたら、若い人達自身も世の中の人々も、心安らかになれるのにと、願わずにはいられない。

そして如何に勇壮で優雅な行軍であっても、あれが戦争への序曲じょきょくだったのかと、今、老いた私の心の中はすっかり曇ってしまった。

私が大人になってから、母や年寄りの人達から聞いて解つたことだが、あの兵隊さんが、口々に「坂田山」「坂田山」と言っていたのは、昭和二年、大学生の五郎さんと八重子さんと

いう美しいお嬢さんが心中した、その場所が坂田山だったからである。だが、昭和初期、支那事変が始まる前の頃、心中事件や自殺は珍しい事ではなかった。かの有名な熱海の錦ヶ浦、伊豆の大島の三原山、日光の華嚴の滝、と、各地でその様な事件は多発していた。それが、この坂田山心中を有名にしまったのは第二の事件、猟奇事件へと進展してしまったからである。と言うのは、八重子さんの死体が消えてしまったのである。各家庭へもふれが回り、家々からは男の人が駆り出され、お巡りさんや駐在さん、消防団の人達と搜索が始まったのである。平和で静かな田舎の小さな町は上を下への大騒ぎだったそうである。母の口から、一応私の父も「顔をお出したのよ」と聞かされた。だが、私にはあの父がどの様な出で立ちで、どの様にして土地の人達と山野を歩きまわったのか、どうしても想像出来ない。私が何時も見ていた父、紀州徳川さんと一緒に東京からこの地に来たばかりで、地理も不案内だろうし、毎朝紀州さんの犬のジョンが父を迎えに来て、玄関の敷居に大きな顔と顎をのせ、太い長い尻尾で土間をパタパタと鳴らしながら、父のお出かけを待っていた。祖母が、

「まあージョンや、ご苦労様ね」

と紅茶にひたしたパンを食わせていた。そして父は几帳面なコツコツという足音をさせて出かけて行った。ジョンがコツコツの足元を先になり後になり、お供をして行った父、土地の人は紀州さんと呼んでいた父。母が言うのには、「畑仕事をしている人達に挨拶を受けたら、ただ頭を下げるだけではなく、今日は良いお天気ですねとおっしゃって下さい」と言ったら、父はその通りにしたそうである。だが、家に帰ってから父は母に、